



2008.11.28

153

編集 樋口 みな子

E-mail
minginga@agate.
plala.or.jp
郵便振替
「銀河通信」
02740-7-56535
(6号分1,000円)

2008年を振り返って

今年も残すところ1ヶ月になりました。野幌はこの一週間で白銀の世界に変わってしまいました。久しぶりに野幌森林公園を訪ねました。カラマツやミズナラやハウノキはすっかり葉を落として骨格だけになって空に突き上げています。行きかう人たちの悲しみも苦しみも喜びもずっと同じ場所に立って見続けてきた大木は力強くもあり、優しくもあり、心が安らぎました。

風が吹くと、木に乗った雪が舞い、あっという間に野鳥が飛び立ちました。エゾリスが元気に森の中を走る姿も愛らしい。春よりも森の中は明るく、シジュウカラやコゲラの姿が見られるのも楽しかったです。

昨年11月に雪崩で4人の仲間を失い1年になりました。一緒に登った山や、語らったことを昨日のここのように思い出します。遭難事故の1ヶ月前に私は雪崩セミナーを受講していました。今年2月、キロロスキー場周辺で実施された雪崩講習会では吹雪の中でセルフレスキューの

方法を学びました。初級といってもまだまだ実践が足りません。二度とこの悲しみを繰り返さないように、雪崩から身を守るためには何をしたらいいのかを学び続けたいです。札幌から南極観測隊員として研究者の装備や食料、安全管理を担って出発した阿部幹雄さんは、雪崩講習会などで啓発や普及活動を行っています。11月12日付け朝日新聞のひと欄に紹介がありました。ミニャ・コンガの頂上直下で8人が遭難し目の前を滑落していったそうです。「どうして自分は生き残ったのか」と自らに問いかけながら20年かけて全員の遺体を収容した阿部さんは「自然に従順でなければ命は守れない」と語っていました。この言葉をかみしめたいと思います。

4月中旬から3週間、ヒマラヤ環境調査に参加しました。いままで、家族の生活を考えると長期の海外旅行は無理だとあきらめていました。いろいろ失敗はありましたが行って良かったです。世界が近くになりました。

今年登った山を数えてみたら35山になりました。来年も元気に山歩きと、読書や映画から生きる力や感動を貰いたいです。

2009年は平和で安心して暮らせる社会であって欲しいですね。今年最後の通信です。来年もご愛読いただけますようお願い致します。



撮影 田邊信行さん
10.20 山形県の蔵王で



11.24 野幌森林公園の冬景色

紅葉の山々を満喫しました。

北日高岳

日本山岳会の山行が今年初めてありました。10月4日に日高青少年自然の家に宿泊し翌日登ったのが北日高岳です。

前日に日高山脈館の東学芸員から日高山脈の地層のレクチャーを受け、蛇紋岩で出来ていることやサンゴやヒスイがたくさんあることなどを知り、山歩きの楽しみが増えました。8500万年前は北日高岳は海だったそうです。

針広混交林の山道は紅葉が丁度見ごろで、適度にアップダウンもあり快適な尾根歩きでした。スキー場のリフトが見えるとそこが頂上でした。ダイナミックなサンゴの滝では地元の山岳会の人たちが岩登りの訓練をしていました。

下山後、地元のTさんの提案で日勝峠7合目まで車を走らせ、そこからたった20分で沙流岳に登りました。ペケレベツやピパイロが見える展望の山でした。



10.5 北日高岳頂上で

泉ヶ岳～北泉ヶ岳

日本山岳会の仙台での北海道・東北地区集会在10月18日(土)19日(日)とあり、私たち4人はH田さんの車で苫小牧港からフェリーで仙台港に着きました。

船は大きなお風呂や、歌謡ショーまであり、ゆったりした旅が楽しめました。

18日は中村保氏のヒマラヤの東チベットのアルプス～東チベットの山と横断山脈」というテーマのお話。ここでも地球温暖化による氷河の後退が深刻なことが話されました。人跡未踏のチベット東部でもせき止め湖や地肌が露出し、自然災害が発生しているそうです。



北泉ヶ岳頂上

19日は3つのコースに分かれての登山と観光。私たちは泉ヶ岳～北泉ヶ岳の5時間コース。登山口から水神、賽の河原を経て山頂へ。やはり北海道とは温かさが違います。紅葉は7分目ぐらい。たくさんの市民でにぎわっていましたが、ブナの原生林が美しかったです。

北泉ヶ岳の展望は無く少しがっかりでした。気になったのは登山口の駐車場に立派なトイレがあるのに、ティッシュが散乱していたこと。トイレ場になっている所では異臭がしていました。北海道の山が断然きれいです。市民運動があるとないとでは随分、登山者の意識も違うのですね。

蔵王山～熊野岳～刈田岳

20日は蔵王に足を延ばしました。今にも雨が降りそうでしたが私たちが歩き始めるとどんどん雲が切れ、蔵王火口湖のお釜が美しいコバルト色に輝き、見事に火口に山を写しだしていました。

蔵王の主峰、熊野岳の山頂部は溶岩の岩塊などで広い荒原になっていました。天気が荒れると道に迷うような山です。近くには立派な避難小屋がありました。奇遇にも東北集会で会いした新潟のTさん夫妻と熊野岳頂上で再会。どこに行っても山の仲間と会えるのは嬉しいですね。



コバルト色の湖面が美しい蔵王のお釜

写真提供 田邊信行さん
熊野岳頂上で

山形では美味しいお蕎麦を食べました。出羽路庵の手打ち蕎麦は絶品。2,000円と高かったですが、喉越しが良く、幾らでも食べられる位美味しかったです。並んだ甲斐があるというもの。山形にお出かけの時は是非賞味してください。



定山溪朝日岳

10月6日に定山溪朝日岳に登りました。紅葉がピークを迎え、ジグザグ道の斜面は黄色と赤のグラデーションが素晴らしく一気に登ってしまいました。

温泉までの帰路は、定山溪の溪谷を見ながらでした。この紅葉は大雪山系の紅葉にもひけをとらない、息を呑む美しさでした。定山溪は裏側に回るとこんな自然が残されているのです。札幌再発見の山旅でした。

10月26日には小天狗岳に登りましたが、紅葉はすでに終わっていました。雨でくすみ、散った落ち葉を踏みしめると晩秋の寂しさを感じました。



10.6 定山溪の紅葉

鎌倉散策



11.4 鎌倉文学館へ続く森のアーチ

山岳会の自然保護委員会の会議があり、11月初めに東京に出かける機会がありました。友人が鎌倉に住んでいるので、一日泊めていただきました。友人の二人の子どもたちもすっかり大きくなり頼もしくなりました。9歳のお兄ちゃんと5歳の妹で住まいの近くの長谷寺を案内してくれました。勝手知ったる我が家の庭のように上手に見所を教えてくださいました。

4年ぶりに会う友人夫婦は、東京都内から住まいを移しスローライフを楽しんでいていいなあと思いました。幼稚園もすぐ隣なんです。鎌倉は観光地ですが、ほんの少し中に入ると車の音もしない静かな環境と山も見える景観に心やすらぎました。

11月4日、朝は寒く感じましたが、長谷から鎌倉駅まで、友人がコピーしてくれた地図を片手に裏街道を歩きました。1時間ぐらいの距離を2時間かけて、まずは鎌倉の大仏から。平日だからか人は少なく、堂々たる大仏はまるで空に浮かんでいるようでした。鎌倉文学館は坂の上にあります。あいにく休館でしたが、アーチになった木々の間を何匹ものリスが軽快に飛び回っていました。うっかり通り過ぎてしまいそうな吉屋信子記念館も見つけました。瀟洒な住宅や昔ながら古いお屋敷など、鎌倉は文学の香りのする街でした。

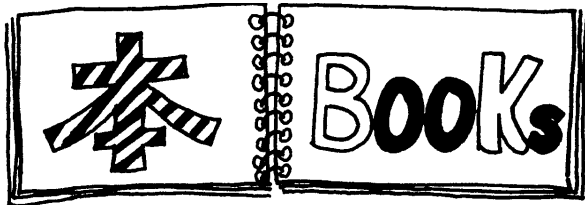
鎌倉駅に着いたのは丁度12時頃。1967年から営業しているという小さな喫茶店に入りました。昔ながらのサイフォンで煎れたコーヒーが美味しかったです。老若男女のデートの場所らしくゆったりコーヒーを飲んでいるカップルで賑わっていました。アップルパイとのセットで600円は安いと思いました。昔気質の店主の心意気が伝わるコーヒーを私もゆっくり味わいました。



吉屋信子記念館

鎌倉は落ち着いた景観がいいのは皆も認めるところですが、街を歩いていて清潔なことも気持ちがいいです。

友人の話では、リサイクル出来る物の分別が全国でもトップだそうです。鎌倉で住んでいる人たちの美しい町づくりへの思いが素敵だと思いました。



「トゥイーの日記」 ダン・トゥイー ・チャム著

高橋和泉訳 経済界 1600円+税



ハノイ出身の若い従軍女性医師ダン・トゥイー・チャムはベトナム戦争で、傷病兵の治療にあたり、1970年6月22日に米兵に撃たれ死亡。27歳でした。

トゥイーが戦場に残した日記は米軍の情報士官フレッド・ホワイトハーストの手に入り、2005年5月、35年ぶりに遺族のもとに返されました。

医師である父と大学講師の母のもとに5人姉弟の長女として生まれたトゥイーは南ベトナムのクアンガイ省の野戦病院に勤務しますが、戦火は日増しに激しくなり、若い兵士が次々に犠牲になっていきます。

トゥイーは記します。「傷ついた戦士たちが青白い額に汗を浮かべ、一步一步踏みしめるように峠を越えている姿は、かわいそうで見えなかった。

これからもし平和な社会主義のもとで暮らせるようになったら、みんな、今のこの光景を思い出して欲しい。(略)血を流し、犠牲になった人たちのことを記憶にとどめていて欲しい」。

たくさんの若い友人が戦死する中でも、希望を持ち続けたトゥイー。「夢の中ではハノイのチュー・バン・アン高校にいた。クリーム色の壁の風通しが良い教室の中で、音楽の五線紙(略)ノートの表紙に貼ったキクの押し花・・そんなものまで夢に現れた。そして父さんや母さん、たくさんの北部の友人に再会できた。平和と独立はベトナム3000万人の心の中で熱く燃えているんだ」と記します。

日記には何度も夢という言葉が出てきます。戦火の緊迫した日々にあっても、希望と豊かな感受性を失わず、素直な気持ちを綴り、自分の心と向き合った日記です。

この日記から10代から20代の青年たちが、ベトナム戦争を闘っていたこと。ゲリラ戦の激しさが手にとるように伝わってきました。ずいぶん昔に観たベトナム映画「無人の野」にも平和に暮らす若い夫婦がゲリラ戦に巻き込まれて行く姿が描かれていましたが、庶民の側から描かれたベトナム戦争の実相がよく分かります。

戦闘機も唸るのをやめた静かな夜。最後になった日記には「頭の中では家族や仲間との食卓を囲む光景を思い描いていた。帰ったらきっと家族を大切にしよう。平和な暮らしの1分、1秒の重みに感謝して暮らそう。それはここで暮らして初めて生きることの価値を知ったから。ああ！数え切れないほどの人の命や青春と引き換えに得られたこの生活！いったいどれほどの人生が私たちの生のために断ち切られたのだろう」と記しています。父母や妹たちへの懐かしい思いや、トゥイーを姉のように慕う青年たちに注ぐ愛情、失恋した恋人への断ちがたい思い、故郷の風景などが情感豊かに綴られ胸打たれます。

平和な日がくることを信じ続けたトゥイーの心の叫びを聞いて欲しいと思います。

「女性史研究・ほっかいどう」第3号 2008年10月

札幌女性史研究会 1000円(送料別)問い合わせ

林恒子方(011-781-6443)

地域に生き、地域を支えてきた北海道の女性の歴史を掘り起こす市民グループ、札幌女性史研究会が設立30周年を迎えたとの事です。長年の活動を支えてきたのは「地域史に埋もれがちな女性の足跡を次世代に伝えたい」という熱意だったと北海道新聞に紹介されています。

本書には、女性史30年の記録や聞き書き、道内外からの研究者や女性団体の代表らから11編の寄稿を収録。

銀河通信読者の本田明子さんが戦死した長兄の市立札幌商工学校時代の学友誌に巡り合ったいきさつを書いています。

明子さんにとっては、写真でしか顔の知らない兄が在籍した学生時代に投稿した詩2編が載った学友誌が不思議な縁で届くのです。同じ頃、兄と同時期に中国で従軍していた明子さんのかつての勤務先の上司から、戦死した近くの場所を示す写真が送られてきたといい、卒業時の晴れやかな笑顔を奪った戦争は二度と繰り返させてはならないと結んでいます。



林恒子さんが聞き書きした、昭和の教育一生徒として教師として一葉美智子さんや、心は常に今にある一祖母、斎藤ハクの歴史を書いた斎藤道子さんの文章は、生き生きと当時を彷彿とさせて引き込まれました。

100歳で亡くなった祖母の人生を私も書いてみたかったという思いを重ねながら読みました。



「クルマのない生活」フライブルクより愛をこめて

今泉みね子著 白水社 1600円+税

ドイツを中心とする環境政策を客観的に紹介してきた今泉さんが、これまでとは趣をかえて、自然との関わりや環境政策にまつわるさまざまなテーマを、今泉さん自身の生活や体験に即して書いたのが本書です。

今泉さんは、生まれ育った東京での身近な自然とのふれあいや、質素だった家族との暮らし方から環境にやさしい生活の工夫を学んだといえます。

今泉さんの祖父が日本山岳会の創立時の会員であったとか。根津にある小学校に通うのに、毎朝学校の門まで送りながら、植物や鳥、昆虫の名前を教えてくれたといえます。環境ジャーナリストになる素養はこんなところからきているのかも知れません。「土の上を歩くことを知らず、四季に移り変わる植物、葉や花の香り、実や樹皮の触覚も知らずに育つ子どもは、どこで生命を実感できるのだろう。略 人間が自然との触れ合いなしで、心身ともに健康で生きていけるとは考えられない」。の言葉に同感です。

体力があるわけでもない私が、山に登り始めた時、野山を駆けめぐった子ども時代がよみがえりました。自然との一体感、清涼な空気、山道に咲く高山植物の可憐さ。登りのつらさに楽しいと思えない時間もあります。雄大な山を眺めているだけで清々しい気持ちになります。

今泉さんはクルマのない生活を続けています。免許も持ちません。環境政策で世界をリードしているドイツでも自動車交通が優先されているといえます。トラック輸送が増えたために高速道路が渋滞し、大量の二酸化炭素や大気汚染物質が出ているのに、貨物の鉄道輸送を拡大、充実させようとする政策が出てこないとい嘆いています。

この広い北海道に住んでいると、山に行くにも車がないと移動がとても大変。市民の大きな声がかかる前に、一方的にJRもバスも赤字路線は廃止になっています。私が子どもの頃は、たったひとりでJRに乗って、日高の祖父母が住むニセウまで遊びに行くのが夏休みの楽しみでした。

ドイツでは58の都市でトラム（路面電車）が走っているとか。札幌の市電ももっとたくさんの路線があったら乗り継いで街を探索したいです。排気ガスや騒音にわずらわされずに美しい街並みを楽しめるのではないのでしょうか？

人の嫌うイモリやミミズとも子どもの頃から親しんだ今泉さんがドイツの環境教育の優れた実践を紹介したのが「ミミズのカー口」です。子ども達が学校や家庭での生活を変えていく様子を生き生きと伝えていきます。こちらの本も是非お読みいただけたらと思います。

白熱灯を蛍光灯に代えたり、再生紙の利用、キッチンペーパーやラップは使わないなどの工夫が満載。この本の中には等身大の今泉さんが生活者として、環境にやさしい生活への工夫や智恵を多数紹介しています。私も生活を見直すヒントがたくさんありました。

自然公園シリーズ 「利用者の行動と体験」

小林昭裕・愛甲哲也編著 古今書店 3800円+税

近年、オーバーユースによる踏みつけで高山植物が痛めつけられたり、山のトイレ問題が深刻になっています。

本書は自然公園シリーズ3巻のうちの一冊で、公園利用者、特に登山者の数と動きを把握する調査の必要性和具体的な手法について、屋久島と大雪山の事例を含めてまとめています。

「山のトイレを考える会」の事務局長である愛甲哲也さんは研究者として大雪山国立公園で最も利用が集中する黒岳と旭岳を中心とした表大雪地域と旭岳の裾野にある姿見地区の自然探勝路を、モデル区間別に利用者の交通量のカウントと利用者への移動経路のアンケートを行っています。それらの結果から、登山道の順路をいくつか設定し、利用分散による効果を検証。交差数を減らすことで混雑を緩和することにつながると論じ、今後自然公園の管理策として検討されることが望ましいとしています。（6ページに続く）



数年前に登った時のトムラウシ山は本州から来たツアー登山者でラッシュでした。トイレ問題も深刻です。かつては遙かなるトムラウシと岳人の憧れの山でした。今やオーバーユースで悲鳴を上げているのです。

愛甲さん等の地道な研究が行政を動かす力になって欲しいと思います。

「魔女の森へ」小さな楽園の作り方

宮迫千鶴著 海鳥社 1500円+税

50代の旅の終わりにやっと人生の、あるいは自分という生き物の「複雑な味」を楽しむことができるようになったと著者のあとがきにあります。同じような悩みを抱える同世代の女性達との心の交流から宮迫さん流の魔女論と小さな楽園作りを提案したのが本書です。

宮迫さんは「更年期を迎えると、女は老女の道に進む人と魔女の道に進む人に分かれていく。魔女の道はいろいろと勉強しなければならないことが多いが不思議に楽しいものである」とあり、魔女というのは、女性の知恵、女性の力、女性の神秘性を持っており、自然の奥にある原理を知っている女性であるといわれています。

6年前に退職するまで気を張って仕事をしていたのに、出かけるという目的がなくなって私も不眠になりました。人間関係も希薄になり、会うのは家族だけ。以前の自分と現在の自分の間に違和感があってとまどい、いらだちました。今思うと更年期の影だったのかと宮迫さんの本を読んで気がつきました。

親しい友人が宮迫さんにあてた手紙に「私が私を励まし、私は私の人生を生きる」とあります。子育て中は無我夢中で気が付かなかつたけれど、夫と行動パターンや考え方の違いに、はたと考え込むことってこの世代なら少なからずあるのではないのでしょうか？宮迫さんの友人のようにここまできっぱりと言いきることは出来ないけれど、私も私の楽しみ方を見つけた気がします。宮迫さんは『夫と妻という関係を卒業して「上手に親友になる」(略)それぞれの方法で自由に人生を楽しみ、そして時には親友として一緒に人生を楽しむ』ことを提案しています。

宮迫流魔法の基本は「どうにもならないこと」と「どうにかなること」を見極めること。「どうにもならないこと」は空や海、山などの大いなる自然に委ねて手放し(他力本願)、「どうにかなること」は熱く努力しよう(自力本願)。とあります。

自分だけの楽園作りを始めていた宮迫さんは今年亡くなりました。まだ61歳の若さでした。天国でほうきに乘った魔女になって、理想の楽園で生き生きと楽しんでおられるのでしょうか。

「心のガーデニング」読書の愉しみ

年間定期購読1000円(送料込み)心のガーデニング書房

郵便振替01700-3-105931

福岡発信の小さなブックガイド「心のガーデニング」を紹介して下さったのは銀河通信の読者でもある小野有五さんです。主婦が手作りで2ヶ月に1回発行していて現在101号になります。

印象的な表紙を開くと『二十一世紀をむかえてひとりひとりが素敵な生き方をしたい。そのささやかな足がかりとして「本が身近にある暮らしを」と願い発行をおもいました。すぐれた本は私たちを楽しませ生きる力を与えます。読書の愉しみにまつわるメッセージを届けます』とあります。新聞の書評とはひと味違う本の紹介と本にまつわるエッセーが素敵です。

私も「心のガーデニング」から「海の贈り物」と「海辺の一年 もう一度愛しあうために」を知り、銀河通信でも紹介しました。

101号で(9・10月号)では「森は海の恋人」運動で宮沢賢治イーハトーブ賞を受賞した畠山重篤さんが「リアスの海辺から」と題するエッセーを連載しています。宮城県のこの取り組みはドキュメンタリーで見てすごいなあと感動しました。

私の「銀河通信」も宮沢賢治の生き方に共感して少しでも近づけたらとの思いをこめて名前を付けました。

これからどんな本が紹介されるのか今からとても楽しみです。



映画



「おくりびと」滝田洋二郎監督

東京で楽団のチェロ奏者だった小林大悟（本木雅弘）は失職して妻（広末涼子）と郷里の山形に帰ります。「旅のお手伝い」という広告に惹かれて就職すると、旅行会社ではなく遺体を棺に納める納棺師でした。

社長の佐々木（山崎努）に葬儀に連れていかれ、自ら遺体を丁寧に清め、仏衣の着替えや、化粧を施す姿に主人公は打たれるのです。ともすれば重くなるテーマですが厳粛な中にもユ

ーモアがあり、アイドルグループの頃の印象とがらっと変わりました。

勘違いから納棺師の仕事をするようになった主人公ですが、死体を扱う仕事のため、周囲の目は冷たく妻にも打ち明けられません。

主人公は、さまざまな境遇の人たちの死と向き合う中で、尊厳を持って死者をおくる仕事の奥深さや大切さに気づくのです。自身の人生や妻への気持ち、幼い頃に家族を捨てた父との関係を見つめ直して行きます。

夫の仕事は「汚らわしい」と怒り、実家に帰ってしまう妻も、近所の銭湯のおばさん（吉行和子）が亡くなり葬儀に行きます。納棺師としての夫の仕事を見守ります。遺体を清拭し、着せ替え、化粧する。厳粛であり、無駄のない簡潔な手の動きが素晴らしいです。本木雅弘が納棺師について書かれた本を読んで、この映画を発案したそうです。納棺師とは生と死の橋渡しをする大事な仕事だということがこの鮮やかな手の動きから伝わってきます。

幼い時に父が失踪して行方知れずになっていたのが思いがけない形で再会します。工事現場で亡くなったのです。その父を見送るとき、父の手に握られていた小さな石にジーンとしました。父は息子をずっと忘れてはいなかったのです。

モントリオール世界映画祭でグランプリを受賞。本木は「死に別れる時間を慈しむ人々の姿から、生きていることの尊さや、命をつないでいくという全世界共通のテーマが通じたのかなと実感した」と語っています。

本木雅弘の誠実さと清潔感がとても良かったです。

「最高の人生の見つけ方」

監督 ロブ・ライナー（米）

余命半年と宣言されたらあなたなら何をしたいですか？ 勤勉な自動車整備工カーター（モーガン・フリーマン）とお金も地位もあるけど孤独なエドワード（ジャック・ニコルソン）が病院で出会います。

お互いにがんを宣告され、人生の期限を言い渡されます。二人を結びつけたのは棺おけに入る前にやっておきたいことを書き出したリストです。

病院を飛び出す元気があるの？と現実ばなれはしていますが、人生でやり残したことを実現させるために、生涯最後の冒険旅行に二人は出かけます。あちこちで起こすトラブルもなんのその。スカイダイビングに荘厳な景色。ライオン狩り。夢をあきらめ続けてきた

カーターと、望むものは何でも手に入れてきたエドワードが、最後に見つけた本当の幸せ。お金では買えないものがあったのです。私は何をやるだろうかとずっと考えていました。世界中を旅してみたいけどお金がないもの。でも人生を悔いなく楽しく生きるのに遅すぎるということはないのだと素直に感動しました。

共に70歳の二人がやりたいことにチャレンジしていく姿が格好良かったです。ジャック・ニコルソンがわがままいっぱいなのに、子どものように喜々として冒険に挑戦する姿がいいですね。モーガンも家族のために自分の夢をあきらめて生きてきたけど、どんなに家族に愛されていたか知り社会で成功するだけが幸せではないことに気づくラストも良かったです。



購読料をありがとうございます 10月3日～11月20日

芳村宗雄（札幌市）則末尚大（旭川市）高野ケイ（札幌市）12号分笹島秀則（様似町）12号分福田光子（秋田市）
太田肇・朋子（鎌倉市）梅沢俊・節子（札幌市）佐藤礼人（北広島市）カンパも含む5,000円小野有五（札幌市）
書籍 梅沢俊（札幌市）カレンダー 市根井孝悦（函館市）カレンダー 西村智磨子（小金井市）60円切手200枚
20円切手100枚（敬称略）

合計14,000円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。

今年最後の通信です。郵送を希望される方は1年分1,000円の振込みにご協力ください。

郵便振替「銀河通信」02740-7-56535

「幻影師アイゼンハイム」

監督 ニール・バーガー 米・チェコ合作



舞台は19世紀末のウィーン。ハプスブルク帝国末期の文化の都では大がかりな奇術（イリュージョン）が人気を博していました。アイゼンハイムという名の幻影師が舞台の上で幼なじみのソフィと再会します。かつての恋人でした。身分違いで引き離された過去が描かれます。

今は皇太子の婚約者として注目を集めていました。この恋は成就するのだろうか？とイリュージョンの魅力に引きつけられました。ほどなくソフィは皇太子邸で謎の死を遂げます。

アイゼンハイム（エドワード・ノートン）の陰影のある演技と天才的なイリュージョンの数々に釘付けになりました。

皇太子の側近の警部（ポール・ジアマッティ）がイリュージョンの仕掛けを探ります。この二人の攻防が見所でもあります。

私は最後まで、アイゼンハイムが仕掛けたトリックには気がつかずでした。ラストが爽快です。名作「ショーシャンクの空に」は映画館でもビデオでも何回も見ましたがそれに匹敵する素晴らしい映画でした。

幼なじみのソフィへの愛の深さに泣けます。新作の時に見逃し少しだけ古い映画を上映する蠍座で見ました。

20周年の節目に

7月（151号）で銀河通信を発行してから20周年になりました。読者から「祝う会」をやりたいと言っていただき実行委員会を立ち上げ、準備を進めて下さっています。読者の皆様には20周年を祝う会の案内が届いたでしょうか？

皆様にお会いできるのを楽しみにしております。ご都合の悪い方はメッセージだけでもお寄せいただけたら今後の発行の励みとしたいと思います。1月31日（土）17時30分から北海道厚生年金会館です。



4.28 ヒマラヤのクーンブ山群

2009年のカレンダー

来年のカレンダーをご紹介します。植物写真家の梅沢俊さんの「北国の花」「花山脈」などが発売されています。問い合わせはエコネットワーク TEL 011-737-7841 又は FAX 011-737-9606へ

山岳写真家の市根井孝悦さんの「母なる大地 大雪山」-市根井孝悦山の世界はりんゆう観光 011-711-7106で販売しています。直接だと1,000円、郵送込みで1,500円です。

鳥のことば・人のことば

「加藤幸子の見つめる世界」 10.25（土）～12.14（日）



北海道立文学館で企画展、鳥のことば・人のことば「加藤幸子のみつめる世界」を観てきました。

加藤幸子さんは芥川賞作家としても有名ですが、東京港野鳥公園を実現するために粘り強い市民運動をした人でもあります。この活動を本で読み、とても身近に思えるようになりました。いくつか著書も読んでいますが「家のロマンス」が大家族を仕切っていた私の祖母を彷彿とさせ、好きな小説の一冊になりました。

文学館では、今までの足跡を写真や、直筆の原稿等を展示しています。北海道自然

保護協会も後援しており、佐藤謙さんのレブンアツモリソウの写真の展示もあります。

「民族の壁も、国境も飛び越えたい」と鳥の飛翔感に憧れているという加藤さんの小説の原点がよく分かる展示です。「ジーンとともに」が改題された「心ヲナクセ体ヲ残セ」を早速買い求めてきました。

12月14日（日）までです。ご都合をつけてご覧下さい。